

蓋（32・33）など飛鳥IVに属するものが混じり、小型化した須恵器杯G（35・38・39）、杯H（40）は飛鳥IIに属する。

まとめ

今回の調査では、1979年度に確認した7世紀代の斜行溝SD367の西延長部を検出するとともに、その溝を埋めてから建てられた掘立柱建物SB370の西妻柱列を検出した。斜行溝の堆積土中には、7世紀前半から中頃にかけての土器が多数包含されており、上述したように飛鳥時代の土器編年に手がかりをあたえる一括資料として注目できる。また掘立柱建物は、川原寺創建にかかわる遺構とみられ、中心伽藍の西方にも寺院の活動を支える施設が置かれていたことがうかがわれる。

調査ではさらに、12世紀代の集落を囲う環濠の跡を検出した。確認したのは延長わずか8mほどであるが、2m強の溝幅や逆台形をなす断面の形状などから、これが「環濠集落」にともなう環濠であることはほぼ誤りない。同様な環濠の例は、藤原宮の西方官衙北地区でも発掘されている（藤原宮第27-6、63-2、66-2～4、71-15、75-12次調査『藤原概報10・21・22・24・25』）。そこでは幅約2～4mの濠が、南北約65mの範囲を方形に囲んでいる状況が復原されており、その規模から「環濠集落」よりはむしろ「土豪の居館」であろうと考えられている。

しかし、濠は部分的に二重になったり、今回の調査のようにT字形に組み合はさったりして、なお北の方へ続き、最終的に環濠がめぐる範囲は、さらにひろがるようである。問題は、環濠で囲まれた内部にどのような遺構が存在したかであるが、部分的な調査地の制約を受け、建物跡などはまだ見つかっていない。その解明は今後の課題といえる。それでも、これらの遺構が、12世紀後半に始まり14世紀まで存続したことが、出土土器や井戸枠に残された紀年銘から知られている。

川原寺周辺で、これまで「環濠集落」の存在が注意されたことはなかった。現在の集落のあり方などからすると、環濠で囲われるべき範囲は、今回検出した濠の西北方であろう。それは、濠に沿う堀が囲う方向もまた西北を示しており、この部分が、川原集落の東西の分水嶺（？）となる尾根筋にあたっていることもその想定の正しさを示している。残念ながら、環濠に囲まれた集落の大きさや構造、とくに内部でどのような生活が営まれていたのかなどを知る手がかりは、今のところない。現集落と重複する可能性が高く、調査の進め方に困難を伴うが、中世の川原寺との関連を考える上でも環濠集落の調査は重要なと思われる。発掘の進展が期待されるところである。

（黒崎直 土器：西口）

コラム：あすかふじわら⑤

◆短命だった両槻宮

1992年、飛鳥・酒船石遺跡のある丘陵が、石垣で化粧していることがわかった。それは、花崗岩の地覆石上に、天理から運んだ壇状の砂岩を積み上げ、高いところで4段（0.7m）残していた。

その様子は、齊明2年（656）、後飛鳥岡本宮からみた両槻宮造営の記事を彷彿させた。そこでは、積石の内側の丘陵を版築で補強していた。そして斜めに亀裂が走り、地震によって、版築層がずれていた。

酒船石は、両槻宮の天宮にかかる重要な施設らしいことがわかった。あの酒船石は水占いでもする施設だろうか。

その後の調査で、後飛鳥岡本宮側の斜面には、石列を3段にめぐらせていた。

1997年度、万葉ミュージアム建設予定地の調査で、藤原宮期につくった石敷井戸に酒船石遺跡の砂岩切石を転用していた。

さらに、明日香村調査による酒船石丘陵西下の調査でも、飛鳥淨御原宮の時期の大型建物があり、周囲の舗装、方形区画などに同様の砂岩切石を転用していた。切石は、寸法にバラエティがあり、加工痕跡から、酒船石丘陵の壁面につかっていたものである。

つまり、天武朝には、両槻宮の石積化粧を剥がして、他の施設に転用して

よい状況であった。地震は、天武13年（685）の崩壊痕跡と理解されているので、その結果、廃棄を促進したのである。その節目は、近江大津宮への遷都、壬申の乱も影響した。こうしたことを見ると、齊明2年に造営した両槻宮は、齐明朝だけの短命だった可能性があろう。

だが、持統10年（696）、二槻宮行幸の記録をどう理解するかにあるが、これは酒船石丘陵西で判明した南北大型建物に関するものであろう。そこでは、もはや、道教にもとづく宮殿としての機能はなかったと思う。

（猪熊兼勝）